

学 会 報 告

日本フードシステム学会大会

吉田 泰治

6月14～15日の2日間にわたり北海道大学において、日本フードシステム学会の平成15年度大会が開催された。発足から10年目の記念大会であった。

日本フードシステム学会は、「食」に関することを産官学一体的に研究する集団として、当初は任意の研究団体「フードシステム研究会」として発足した。その後正式の（学術会議登録の）学会となり、現在に至っている。この学会に関しては、筆者も設立発起人の1人として当初から関わってきたが、この学会の特徴として研究の範囲を、経済に限定せず、食品科学、医学、商学等幅広い分野を研究することを目指したこともあり、経済以外の分野を専攻する会員も少なくない。また、学者・研究者だけでなく、食品に関連する企業の関係者などの会員も多い。こうした意味で他の学会とはかなり性格が異なっている。

しかし、そうした幅広い活動を行うことは、一方で、研究の焦点が定まり難いという反作用もある。「フードシステム学」とは何か、という問に対する確かな答を用意できる学会員は、残念ながら、あまりいないだろう。そうした根元的な問題に應えるより、学会としては、走りながら考えて行くという現実的な選択をしているように思われる。（一方、「フードシステム学全集」全8巻の刊行が行われており、学会としては、より理論的な整理はこちらで行うという考え方であろう。）

食に関しては、学会発足時には想定もしていなかったBSEをはじめとする「安全性」の問題など、新しいこと、研究しなければならないことが続々と起こってきている。こうし

た新しい問題の解決に学会として貢献して行くことが求められているし、例えばBSE問題の解明などで重要な役割を果たしてきた方々が、当学会のコアメンバーであったことは、偶然ではない。

そうした意味で、今年の大会では、シンポジウム「フードシステムの地域性と国際性」よりも、翌日に行われたセッション「フードシステムと社会的責任」の方がタイムリーであったかもしれない。このセッションは筆者も興味深く聴講したが、この種のセッションの通例として、報告が長すぎ、議論を戦わすまでには至らなかったのは残念である。食に関する今最も重要なテーマの一つであり、セッションではなく、パネルディスカッションという形も考えられたのかもしれない。

もう一つ並行して、会場となった北海道という地域性を生かして現地の生産者、企業家を交えた「北海道におけるフードシステム」というセッションも行われた。

通常の学会と同様、個別報告は多く、今年は四つの会場に分かれて行われた。したがって、すべてを聴講することは不可能であるが、GMO、食の安全性、食品のトレーサビリティなどに関する分野での研究発表が多く行われ、またこうしたテーマには聴講者も多かった。当所からは、薬師寺（食品の流通マージン）、中田（フードマイレージ）、小島（小麦製品の価格伝達構造）の3氏が報告した他、立川氏がGMOに関する報告の座長をつとめるなど、各方面で当所研究員の活躍が目立つ学会でもあった。

この学会に関しては、当所の研究活動とは重なる部分も多く、また会員も多い。来年度以降も、この学会の活動に対して、当所は一定の役割を果たして行くことになるであろう。